

大いそぎ大いそぎ

— 復誦用おはなし —

新 庄 よ し こ

—

大いそぎ 大いそぎ

つばめが一羽飛んで来ました

鼠がチュウ／＼駈け出して来ました

犬もワン／＼駈け出して来ました

猫もニャア／＼駈け出して来ました

蛙もピョン／＼飛んで来ました

燕さん燕さん ぎちらへ 大いそぎ大いそぎ

鼠さん鼠さん ぎちらへ 大いそぎ大いそぎ

犬さん犬さん ぎちらへ 大いそぎ大いそぎ

猫さん猫さん ぎちらへ 大いそぎ大いそぎ

蛙さん蛙さん ぎちらへ 大いそぎ大いそぎ

みんなで川のまころへ来ました

つばめは飛んで行つてしまひました

鼠さん犬さん猫さん蛙は川の中にぎぶんぎ飛び込んでしまひました

右のお話をつい近頃復誦用として使つて見た。年少組ではあるが、もう第三保育期にもなつてゐるので、やすくミ覚え込んでしまつて、大層これを喜んでゐる。これは内容が面白くて、口調がよく、而かも動作の繰り返して作られてゐるので、復誦用としては最もよい條件をみんな具へ

てゐるお話である。

一一

幼児と共にこれをどういふ方法で復誦するかといふことは、きりたてゝむづかしいことは無いが、次のような順序で私は試みて見た。

まづ先生がすつかり覚え込んでしまつてから始める。その上で第一日には三度位續けてゆつくり幼児に話して聞かせる。これを聞きながら幼児が、めいめい自分の頭の中でこの話の筋をはつきり把握出来るやうに、先生はさう考へながら、言葉をはつきり、少しゆつくり。その上で。

「こんどは、あなた達みんなでこれをお話して見ませうね。大きいお聲でね。では始めますよ、つばめが一羽飛んで来ました。みんなでこの通り云つて御覽なさい。」

幼児一同「つばめが一羽飛んで来ました」

先生「鼠がチュウ〜、駈け出して来ました」

幼児一同「鼠がチュウ〜、駈け出して来ました」

斯のようにして、第一回は先生のことばを、すぐ折返し復誦させておく。そしてこの翌日にすぐ第二回をつゞける。こ

の場合三日位間をおいてから第二回にする。何分幼児の事まで、話の筋なり、ことばなりが、又耳に新らしくなつてしまふ。そこで、昨日の記憶の眞新しい翌日を選んでつづける。一三度くり返してゐる中に、先生は段々聲を低くしてなるべく幼児だけで云はせるやうに導く。かくて第三回目も又翌日位にする。もうすつかり覚え込んでしまふ。

「今日はあなた達だけでお話して頂だい。先生はよく聞いてゐますよ」

云つて、幼児だけに云はせる。あやふやな處だけ先生が補ふ。その上で、

「誰か一人でお話出来るかしら」

き聞いて見る。

「ハイ、僕、僕」

き、手を擧げながら、無暗に自分にして貰ひたくて、

立ち上つて先生のまわりに寄つて来る。まだこの中にはさせて見れば一向つよかないのが多い。そんなにみんなが早く覚えるものではないから。みんなの中で、最も記憶のたしかな、発表力のある子を選んでさせて見る。

このような順序にするこゝ、もう一週間位の長い時日が経つても、相當しつかり意味やこゝばをつかみ得て、今度は自分のものとして、發表が出来るようになる。

この話は、動作なり、言葉のくり返しが多いので大變覺え易い。この話を選んだ理由もそこにあるわけである。

この中で最も難しいところは、終りの「みんなで川のミころへ來ました」以下であるから、こゝは前のぎれよりも、數回くり返した方がいゝ。

吟誦にしても、復誦にしても、最も大切な事は、ていをはをはつきりいふこゝ、先生が最初に讀んで聞かせる時に、この點をよく氣をつけて、ミころへミ云つたら、是れで終始するこゝ、途中で、ミころにミかへるようなこゝは決してしてはならぬ。

三

これは、「大いそぎ大いそぎ」いふ簡単なお話をもこにして、復誦用に作つて見たのである。こゝいふのは、一度これを子供に話して見たら大層喜んだ、その上、あくる日になつても、子供の一人二人がつばめさん、つばめさん、

ちらへ、大いそぎ大いそぎ自分で誦んでゐる。そばに居た子も、それを真似てゐる。これをきいて居て復誦にまこゝにいゝ話である事に氣がついた。

然し、話として先生が用ふるものこゝ、復誦用として、幼児が覺えるものこゝは、自ら異なるこゝろがあり、いゝ話であつてもすぐには其儘用ひられない。そこで、幾度か作り直し、自分でも暗誦して見て大體右のように簡單にして、第一回をこゝろみたのである。原作には、鼯鼠が出たり、牡雞、家鴨が出て來てゐる。此點は幼児に相談して見た。

「つばめさんのあみで、いろんなものが駈け出してゐるのね、犬だの猫だのあひるだの」。ミ云つたら

「あひるなんか川に落つこちたつて平氣だよ」

ミ子供の一人が言つた。なるほゞ、この話は、つばめだけは翅があつてミぶから溺れないが、あみの動物が、つばめの真似をして駈け出して來て、川に落ちてしまふ所に面白いがある。その點は、子供に教へられて止めるこゝにした。河馬がいゝよ、キリンもいゝよ、蛙もいゝよ、こゝめいめいに云ひ度いこゝを云ふ、その中から蛙は面白いと思つて、

家鴨をこりかへた。然し河馬や水牛や、キリンはいくら子供
の申し出でも、啼き聲が私には解らないので、結局、
チユウくさか、ピョンくさかの形容にあてはまる動物
を選ぶことにした。

原作をこゝに掲げておく。これは可愛いらしいお話とし
て、年少組の始めにごくいゝと思ふ。

大いそぎ

天から落ちた棒の頭に、燕が一羽まります。棒はばた
ん。倒れました。燕はびつくりして飛び立ちました。そし
て棒の倒れた方へ、真直に風を切つて飛び始めました。

「燕さんごちやうへん」

「大いそぎ 大いそぎ」燕が申しました。野鼠はびつくり
したやうに、自分の穴から飛び出す。燕のあみをかけ出
しました。

「もしもし野鼠さんごちやうへん」

「大いそぎ大いそぎ」野鼠が申しました。鼯鼠は自分の藪
から飛び出しました。そして野鼠の後を追かけました。

「鼯鼠ごへ行く」猫が塀の上からぎなりました。

「大いそぎ大いそぎ」猫は塀の上から飛びおりる。鼯鼠
の後をかけ出しました。

「三毛さんごちやうへん」

「大いそぎ大いそぎ」

犬はあはて、猫のあみをかけ出しました。

「皆さんおそろひでごちやうへん」

「大いそぎ大いそぎ」

牡雞はかけ出しました。牡雞も自分のひよこたちをつれ
てかけ出しました。家鴨もぶかつこうな體を左右に振り
立てながら、かけ出しました。

さて一同は川にさしかかりました。燕は川を越えて向ふ
へ飛んでしまひました。野鼠はまつさきに川に飛び込み
ました。鼯鼠が負けん氣になつて、あみから飛び込みま
した。あみからあみから猫も犬も牡雞もひよこも家鴨も
さんぶご飛び込みました。そしてみんな川の流の早いの
に流されてしまひました。

(作者糸井重吉氏)